

シトクロム c 研究会報告書

日本農芸化学会中四国支部若手研究者交流会（農芸化学会中四国支部学術研究集会）の援助による

開催日：平成15年8月2日（土）、3日（日）

会場：広島大学生物生産学部第三会議室

世話人 広島大学大学院生物圏科学研究科 三本木至宏

平成15年8月2日（土）、3日（日）の二日間にわたり、広島大学において、日本農芸化学会中四国支部の若手研究者交流会開催補助による「シトクロム c 研究会」を開催した。

この研究会には、農芸化学会中四国支部に所属する会員二名の他、広島大学の若い学生、筑波大学と大阪大学の教官・大学院生など総勢 20 名弱が参加した。参加メンバーのバックグラウンドは、農学部はもちろんのこと、理学部、工学部、薬学部と多岐にわたっていた。初日は、午後2時半から7時まで（懇親会も入れれば夜中の1時まで）、翌日は朝9時半から始め、ランチオンで研究会を続け、終了したのは午後4時であった。口頭発表者は、全11名であったが、特に時間制限を設けないセミナースタイルで行ったため、一人の発表で最長2時間も白熱した討論になることもあった。また、筑波大学の山本教授は、本年7月にオーストラリアで行われた国際生物無機化学学会で自らが発表した関連ポスターを会場内に設置し、少ない休憩時間内ではあったが貴重な討論の時間を持つことができた。

さて、本研究会の内容であるが、呼吸鎖や光合成の電子伝達系の構成タンパク質であるシトクロム c は、その発見から 80 年が経過している。真核、原核を問わず多くの生物がもち、単離・精製が比較的容易なことから、シトクロム c の構造と機能に関する知見は数多い。また、タンパク質一般の構造構築原理や生物進化の問題解明にも大きく貢献してきている。今回の研究会は、シトクロム c の構造・物性・機能を異分野間の交流を通して徹底的に解明し、電子伝達デバイスとして有効利用したいとの観点から、微生物学、細胞生物学、分子生物学、構造生物学、錯体化学など多彩な側面から討論が進んだ。生物学と化学の両領域にまたがる研究会を開催する機会を得たことは、大変有意義なものであった。

最後に、今回の研究会を開催するにあたり、補助をいただいた農芸化学会中四国支部に感謝致します。



fig1: 研究会での口頭発表資料

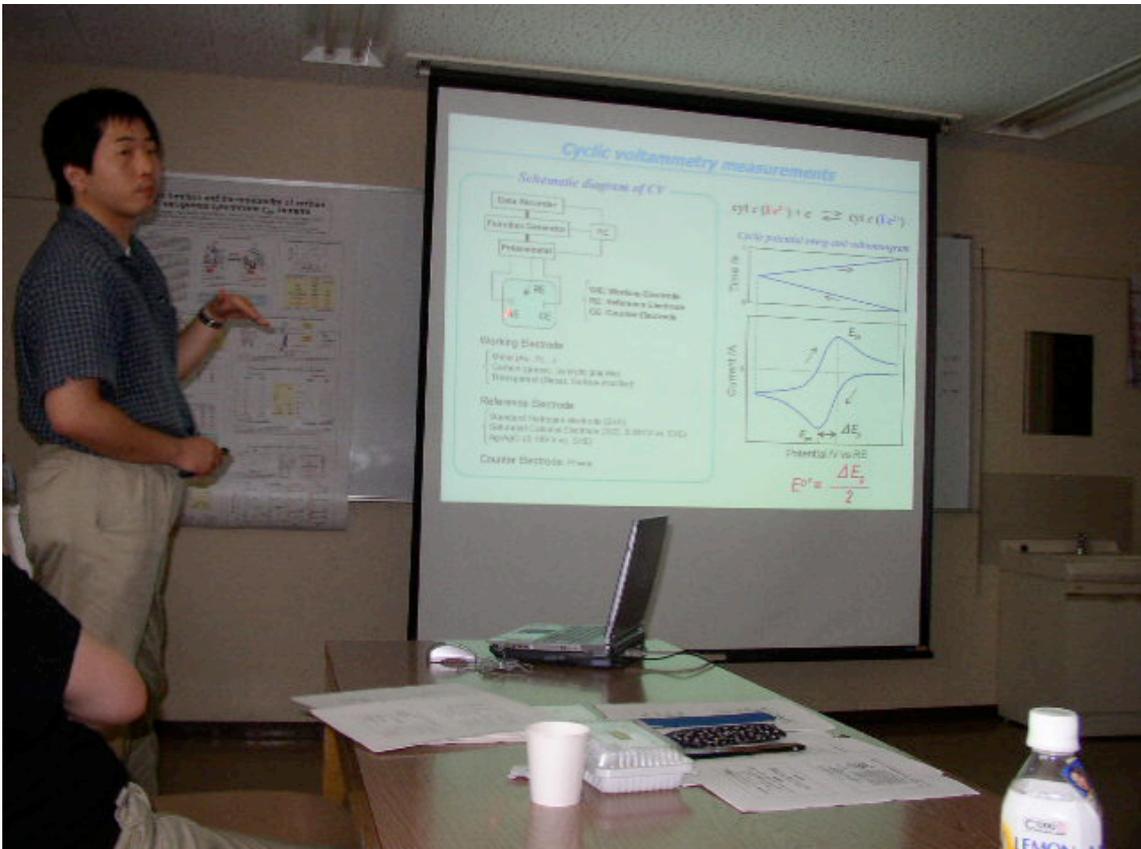


fig2: 招待講演者の一人の照井博士（筑波大学）の講演風景